

## 地名の由来は毛呂氏ではなかった

旧毛呂山町と川角村が合併して60年を迎えた毛呂山町。  
難読地名としても知られる町名の由来を追いました。

# 「毛呂山」はどこからきたのか



臥龍山（写真中央）

毛呂山小学校の北側にあり、山頂に流鏑馬を奉納する出雲伊波比神社がある。他の山と分離されているため、どの方角からも見ることができる。

### 毛呂氏の「毛呂」

#### ではなかった

毛呂山町の町名の由来はなんでしようか。「毛呂山」は、昭和14年に当時の毛呂村と山根村が合併し、それぞれの村の名前から付いた町名です。

山根村は、合併した阿諏訪・大谷木・滝ノ入・宿谷・権現堂・葛貫村が「山根六ヶ村」と呼ばれていたことに由来する村名です。また、この地域がいずれも外秩父山地の山裾にあることから、地形が村名のもとになったとも考えられています。

では、「毛呂」の由来はなんでしようか。この地にはかつて、鎌倉時代に源頼朝に仕え活躍した毛



毛呂季光  
源頼朝に仕え活躍した  
鎌倉時代の武士

呂季光などの「毛呂氏」が住んでいました。このことから、毛呂氏が地名の由来になったと考える人は多くいます。

しかし、長栄寺（小田谷）に伝わる毛呂氏系図に、平安時代の末ごろ、藤原季清（後の毛呂氏）がこの地に移り住み「毛呂冠者」と称したことが記してあります。毛呂冠者とは「毛呂に住む元服して冠を着けた若者」という意味です。つまり、毛呂氏がこの地に住む前から、ここは「毛呂」と呼ばれていたことになりました。

「毛呂氏が住んでいたため毛呂」ではなく、藤原氏が「毛呂に住んだため毛呂氏」になったのです。

## 毛呂「もろもろ」説

昭和53（1978）年に発行された『毛呂山町史』には、毛呂という地名が「いつの頃どうして生まれたのかについては、まだ明らかになっていない」と掲載されています。

しかし『毛呂山町史』では、有力な説として『埼玉県地名誌』（荑塚二三郎著）に「モロはムラの転であるから村落の意味。諸」という字と同じ語源である」と書かれていることを紹介しています。

更に、出雲伊波比神社に伝わる『臥龍山宮伝記』の中に「毛呂は、諸・師などの字の意味がある。臥龍山は毛呂郷から少し離れたところにあり、諸々の氏子を見守っている。このことから、諸々の氏子の諸から地名になった」といったことが書かれているとも紹介しています。

「諸・師などの字の意味」というのは荑塚氏の見解と似ています。しかし、その後続く、山頂に出雲伊波比神社を有する臥龍山

を中心とした毛呂の地形、これを囲む諸々の氏子たち、という説は、この土地ならではの由来のようです。

『毛呂山町史』では、「ムラ」の意「および」多くの氏子を見守る出雲伊波比神社があること」を紹介し、「多くの、様さまの」の意味がある「諸」が由来であることが考えられるとされています。

## 毛呂「高句麗語」説

更に『毛呂山町史』では、モロの語源が高句麗語ではないかとの説も紹介しています。

約1300年前、現在の日高市に朝鮮半島から来た渡来人が高麗郡を建郡しました。当然、この地とも交流があったと考えられ、渡来人が使った高句麗語「MODDO（多くの・もろもろの）」という言葉が「毛呂」に転じたのではないかと述べています。



「中山薬師の懸仏」

町内に残されている「毛呂」という表記のある最古の資料は、文明7（1475）年に作られた『中山薬師の懸仏』（左上）です。鋳銅製の円盤の中央に薬師如来を鋳出し、そしてその右側に「毛呂郷中山薬師」と彫られています。

また、書物に初めて「毛呂」の言葉が登場するものは、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』です。治承4（1180）年12月12日に「毛呂冠者季光同右」という字があります。源頼朝が新亭に移るとき、その右側に毛呂季光が列されたという内容で、地名ではなく氏として登場します。

また、歴史民俗資料館には、『毛呂郷大絵図』

## 歴史資料に探す 毛呂

（右下）という資料が展示されています。この資料は、天保4（1833）年に描かれたもので、それほど古い資料ではありませんが、当時の毛呂郷（旧毛呂村）の全体を尙うことができる資料です。この絵図から毛呂郷が臥龍山を中心とした川に囲まれた村々であることが分かります。

実は町内外にも「毛呂」の地名の由来に関わる古い資料は見当たらず、これまでの見解も定説ではないことが分かります。



「毛呂郷大絵図」

## 新説

# 毛呂「神聖な土地」説

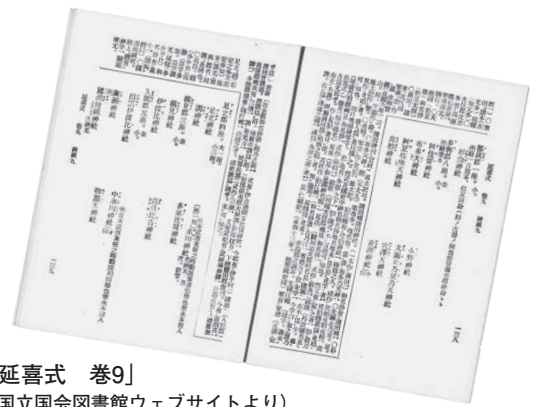
## 万葉集にある「三毛侶之」

昭和59年発行の毛呂山郷土史研究会『あゆみ第十号』に李代清吉氏が毛呂の地名に関する記事を掲載しました。李代氏は、毛呂の地形の特徴的存在である臥龍山に着目し、「万葉集にある「三毛侶之」という表記が「毛呂」に係っているのではないかと提唱したのです。

この「三毛侶」とは「神が降臨して宿る神聖な場所」という意味です。万葉集に「三諸山」という山が登場しますが、これは奈良県桜井市にある三輪山を指します。三輪山は『古事記』や『日本書紀』に神が鎮まれたと記される神聖な山です。

## 千葉県茂侶神社との共通点

延喜7(907)年に醍醐天皇が編纂させた『延喜式』という法典があります。この中に『神名帳』という当時の官社に該



『延喜式 巻9』  
(国立国会図書館ウェブサイトより)

当する神社の一覧があります。

これには、毛呂山町の出雲伊波神社も掲載されていますが、同一覧に「下総国葛飾郡茂呂神社」という神社があります。この神社は現在も千葉県の船橋市、松戸市、流山市にある茂侶神社のことです。茂侶神社の名称は、三輪山の別称である「御室山」、「三諸山」、「御諸山」の「もろ」を由来としていると伝えられています。

また、茂侶神社がある場所には地形的特徴があり、どの神社も毛呂山町の出雲伊波神社と同じように、少し小高い丘の上の様な場所に鎮座しています。

## 毛呂は神聖な地名

毛呂にあまりに似ている茂侶神社。毛呂とのつながりはあるのでしょうか。このことを万葉集研究を専門としている姫路獨協大学の吉田金彦名誉教授にご教授いただいたところ、万葉集の「三毛侶之山」とある歌を元に、「毛呂」の地名も「三諸山＝三輪山」と結びつくものであると考察されました。

少なくとも奈良時代から存在していたといわれる出雲伊波神社がある臥龍山。それをこの地に住んだ人びとが、神聖な山と捉えても不思議ではありません。「毛呂」は、神聖な地名と考えることができるのです。

日ごろ何気なく使い、言葉にしている地名ですが、そのルーツを知ることで愛着や誇りにつながるのではないのでしょうか。

※この説は、李代清吉氏や吉田金彦名誉教授の考察をもとに検証したものであり、定説ではありません。今後も歴史民俗資料館を中心に検証して参ります。



三輪山と大鳥居 (桜井市教育委員会所蔵資料)



船橋市茂侶神社



松戸市茂侶神社



流山市茂侶神社



解説

## 極めて誇らしい意味を持つ「毛呂」

“もろもろ”説、“高句麗語”説、そして新たに登場した“神聖な土地”説。その真偽について、毛呂山町の地域史に詳しい内野勝裕先生にお話を伺いました。

「毛呂山は神が降臨して宿る神聖な町」という説について 毛呂山町文化財保護審議委員長 内野 勝裕まさひろ

地名「毛呂」の語源については、今まで諸説がいられていますが、これまで今一つしっくりしたものが無いと感じていました。例えば「モロ」が「ムラ」や「モロモロ」を語源としているならば、いずれも何処の町にでも通用する普通名詞や接頭語を語源としていることになり、全く「毛呂」の特徴と結び着きませんでした。

そこで、町名の由来の中心になった毛呂郷について考えてみました。毛呂郷の地形の特徴は、何といても村の中央に聳える臥龍山だといえます。出雲伊波比神社に伝わる『臥龍山宮伝記』によれば、臥龍山は「諸の氏子をひとめにみそなわす」山であるとしていますが、むしろ毛呂郷の全ての人びとが朝な夕なに眺め見た山であったのではないのでしょうか。古代人は、アニミズム、すなわち、あらゆる現象・事物に精霊の存在を認めましたが、臥龍山は古代毛呂郷の人びとにとって神の降りくる山、たえず仰ぎ拝むべき神聖な山、「ミモロ」であったのではないのでしょうか。「ミモロ」とは、『日本国語大辞典』（小学館）に『「み」は接頭語）神が降臨して依り付くところ』である。当然、美称の接頭語を除いて「もろ」でも同じ意味である』と掲載しています。また、『万葉ことば事典』（大和書房）にも、『「みもろ」は万葉集に21例、古事記に3例、日本書紀に7例の用例がある』とし、『神の来臨する場所をさす言葉であり、神を祀る森林をさすことが多い』としています。

地名の誕生には様ざまな要素が考えられますが、地形を由来とする地名は、その代表的なものとい

えます。分離丘陵「臥龍山」は、あまりに特徴的な地形であり、毛呂郷を象徴する山だといえます。

ところで、いち早くこの説を提唱されたのが町内在住の空代清吉氏（『毛呂地名考』『あゆみ』第十号）です。素晴らしい慧眼だと感服させられました。一方、万葉学者である姫路獨協大学吉田金彦名誉教授は、地名研究の傍ら二度ほど来町されていますが、この度「毛呂山町の『毛呂』について」という一文をお寄せくださいました。吉田名誉教授はそのなかで、万葉集（巻11-2512）の「うま酒の三毛侶乃山に立つ月の見が欲し君が馬の音ぞする」という奈良県桜井市の三輪山を詠んだ歌を引かれ、「毛呂-みもろ」説を展開されました。さらに吉田名誉教授は、たくさんある万葉仮名「も」の中から「毛」の字を選んだのは最も馴染み易かったからであろうとされています。古代に現在の群馬県・栃木県を中心に栄えた「毛の国」（上毛野・下毛野）のように、「毛」の字は昔の国名にまで使われたと述べています。

このようにみえてくると、毛呂山町という町名に含まれる「毛呂」という地名は歴史的にも古く、奈良時代に遡る可能性があり、その語源も町民にとって誇らしい意味であったといえます。

なお、「毛呂山」という地名は昭和14年の合併以前、戦国時代に初出します。天文6（1537）年、北条氏綱が河越城を攻めた合戦を描いた『河越記』に「毛呂山は左にあたりてかすかなり」とあります。「毛呂山」は中世の人にとっても大和の三輪山のような存在だったのかもかもしれません。